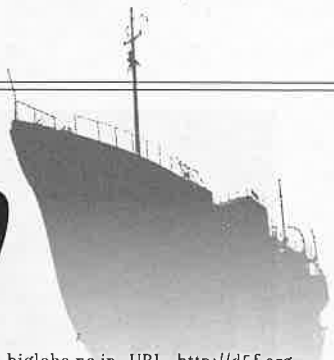


2003.11.15  
No.303

# 福竜丸だより

発行：財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島3-2 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

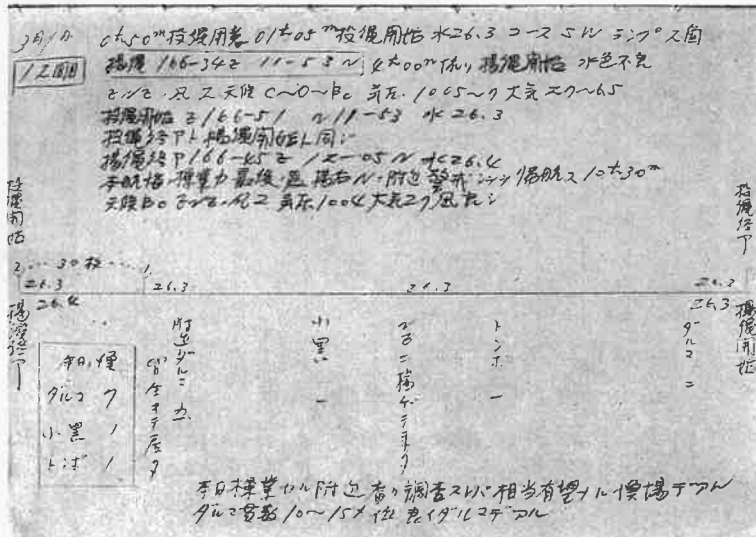
Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail:fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org



ビキニ水爆実験・第五福竜丸被災50年

図録掲載資料より

## 当直日誌、漁労日誌など



展示館には、水爆実験に被災した航海の漁労日誌、当直日誌、天測日誌などを所蔵。写真上は三月一日の当直日誌、下は漁労日誌

第五福竜丸展示館には、船長がつける航海日誌、漁労長が記載する漁労日誌、天測日誌、当直当番が交代でつける当直日誌があります。

上に掲げた当直日誌の三月一日の記載には、「03h17m二四回目投縄終了同機関停止ス 04h30m揚縄開始 揚縄初の位置166-50E、11-53N ピキンニ環礁の中心迄87哩、ピキンニ島迄75哩、03h30m ピキンニ島に於て原爆実験行わる夜明前なるも非常に明るくなり煙柱あがり2時間後にはE80哩の地点の本船には爆発多数の落下を見る五時間に至る。身の危険を感じ只ちに揚縄を開始してこの海域から脱出をはかる。終了後燃料の調査する嚴重な警戒をもって帰路につく」(原文のママ)とあります。

第五福竜丸は、西川角一氏に買上げられ、焼津港所属となりました。展示館には、一九五三年六月一〇日に出港した第一次航海から一月二一日出港の第四次航海の途中まで記載された航海日誌があります。これらは、水爆実験に遭遇した第五次航海のときの船長・筒井久吉さんではなく、それまでの清水船長が記載したものです。筒井船長記載の第五次の航海日誌は、事件後、船の被災位置などの証拠資料として海上保安庁や外務省での検討のために提出されていますが、現在その所在は不明となっています。

# 田川時彦さんの『原爆と人間』を読む

藤田秀雄



田川時彦さん

お会いするたびに、田川さんに、「これまで書かれたものを、まとめて、本にしてください」と頼んでいた。平和教育を追求する仲間として、田川さんが自分の思想を一書にまとめて、世に問うてくれることは、平和教育論の質を高めるのに、大いに役立つにちがいないと思っていただけである。

ようやく待望の本が出版された。

しかし、田川さんは、もういない。この本は田川さんの告別式の日、私たちのものととどいた。

## 誠実で謙虚な人柄

田川さんとは、平和教育の研究会や『平和教育』（年二回刊）の編集会議でお会いしていた。私のいた立正大学で、平和教育研究会をおこなった時、田川さんは事務局長役であったので、二人で仕事をすすめることができた。東京の被爆者組織東友会の会長になられてからは、第五福竜丸展示館に、何度もおいでになった。田川さんと会うのは楽しかった。それは田川さんの人柄のせいである。いつも笑顔をやさしい人であった。引きつけた仕事は、



つねに完全に、ていねいにする人であった。墨で書く、封筒の文字に、誠実さを感じざるをえなかった。しかも、謙虚で、自分を主張するよりも、人の話を熱心に聞いた。

## 被爆者としての心

この田川さんの顔と声を、思いうかべながら、この本を読むのはつらかった。何度も、立ちどまり、前にすすめなくなった。しかも書かれているのは、被爆者、被爆教師の問題である。

「体操ができない先生は、『足の皮膚がくっついて動かすことができない』と運動場で、子どもたちに泣いて謝った。」

「被爆の惨禍も知らなかった子どもたちのなかから、顔にケロイドの残る女教師に

「オニババだ」といったむごい言葉が投げつけられるようになった。」

こういう文を読む時、この被爆教師のあまりにも悲しく、つらい心情を思っ、涙があふれてくるが、これらの証言を引用して書く、田川さんの被爆者としての体験と心をおしはかる時、さらに苦しく、先が読めなくなるのである。

しかし、それだけに、すべての人に、この本を読んでもらいたいと思う。

内容は、被爆の実相、被爆者援護法案審議のさい（一九九四年）の田川さんの意見陳述、被爆体験にもとづく平和教育の展開、被害の教育と加害の教育のむすびつき、「自由主義史観」のあやまり、田川さんの「わたしの昭和史」、平和教育、文学教育の課題である。

## 平和をつくる行動へ

イラク戦争反対デモをみて、日本での平和運動参加者数は、まだ少ない。アメリカの教師たちは、「クビにする」

とおどかされても、デモに参加している。人数は日本の十倍以上である。知るとともに行動しない限り、平和な日本、平和な世界はできない。行動への勇気を与えてくれるものは、山本宣治、小林多喜二、内村鑑三らの思想と生き方である。また、被爆の体験を語る苦しさをのりこえて証言し、平和運動に生きる人たちの心情と人生である。

したがって、とくに平和教育をこころざす人でなくとも、平和をねがうすべての人にぜひ読んでほしい。

\*

本書は、高文研刊、二一〇〇円。なお第五福竜丸展示館でも、購入できます。

（第五福竜丸平和協会副会長、立正大学名誉教授）  
〈編集部注〉田川時彦さんは七月二五日に亡くなりました。享年七四歳。長年、平和協会の賛助会員として尽力されました。



# 『わたしとビキニ事件の手記』

第五福竜丸平和協会ではビキニ水爆実験から五〇年を記念し、広く市民の中での事件の「記憶」をあつめ記録する回想・手記の収集や募集をおこないます。ここに紹介するのは、雑誌「L'AMER」(ラ・メール)二〇〇三年一一・一二月号に掲載された佐久間誉(ほまれ)さんの随想です。なお、見出しは同紙のまま、後半部分を割愛しました。

## キャプテン佐久間の おもしろ海話 —放射能事故—

一九八六年四月二十六日、私は東京へ苦小牧のフェリーに一等航海士として乗船して来ました。甲板部の長として、運航、荷役、保守整備等を管掌し、自身は通例、朝晩四〜八時の航海当直に従事します。

この日、旧ソ連(現ウクライナ)のチェルノブイリ原発で原子炉暴走・爆発事故が発生しました。ニュースを知った私は、甲板長(ボースン)に屋外での作業を一切しないよう指示しました。特に雨中での作業は絶対的に禁止と念を押しました。この処置はキ

ャプテンには特に報告はしませんでした。それは、やはり日本から距離的にみて遠かったからです。

私は往々にして気が弱く、上の方に相談して、そして否定されたら困ると思ひ、大方独断でした。職業選択も結婚も。この場合も相談すれば、そこまでしなくてもよいだろうと言われるのが関の山でしょう。独断といっても安全サイドに立った考え方でした。

ではなぜこうした判断に至ったのか。この時点での思いは記憶していませんが、最近、つぎのようなことがその深層心理にあったからではないかと、思い出されることがあります。それは小学校三年生のときにさかのぼります。

一九五四(昭二十九)年三月一日、太平洋マーシャル諸島のビキニ環礁で遠洋マグロ漁船第五福竜丸が米国の水爆実験による「死の灰」を浴びたのです。帰国後入院された無線長の久保山愛吉さんは重症状態でした。当時、テレビもゲームもない時代、私はすることもなくラジオを聴くことが多くありました。そして午後の定時にニュースの中でか、あるいは独立して、久保山さんの血圧や脈拍などの容態を毎日毎日放送していました。私は子供心に、全国民の願いと同じように助かって欲しいと思ひながら聞いていました。しかし願ひは叶いませんでした。

以前、私は伊豆沖で大きな地震多発の中、後に発煙筒によるものと判明する煙を海底火山ではと疑い当局に通報したことを書きました。この時、意識していたかどうか覚えていませんが、やはり子供の頃の一九五二(昭二十七)年に発生した伊豆七島の更に南の明神礁で海底火山の爆発があり、それが子供の私の脳裏に記憶として残り、そして行動

に現れたのです。単なる爆発ではなく、調査に派遣された海上保安庁水路部の観測船第五海洋丸が行方不明になりました。多分これは音声ではなく新聞を通して視覚として入ったものでしょう。これら二件の子供の時の出来事が五十年経っても情景として浮かんでくるのです。

そしてビキニ環礁と明神礁の共通の「礁」の字、船長・航海士になって衝突という水

面上の問題と共に、水面下の礁(浅瀬)をいつも意識する心は何やら船員教育機関で教育を受ける以前から子供心に作用してきたと振り返るのです。(後略)

\* 佐久間さんは、長らく長距離フェリーの船長を勤め退職して現在、つくば市在住。勤務当時は有明埠頭から展示館の前をよく通っていたとのことです。雑誌「ラ・メール」は海事広報協会発行。

## 大学生の感想文から

高校の歴史の授業で習った船を実際に見ることができ、大石さんの話を聞くことができた大きな体験でした。事件のことは表面的な事実しか知りませんでした。

大石さんのお話を聞いて、当時の米ソ間の核開発競争という時代背景や乗組員の生活、家族の存在などを知り、事件の重みが実感を伴って来たような気がしました。自分と無関係の遠い昔に起きた事件でなくなったのは確かです。

この事件が風化されることなく人びとの記憶に生き続けることを願っています。

(九月二八日、女性・一九歳)



## 平和協会設立30周年

財団法人第五福竜丸平和協会は、この11月28日、設立30周年を迎えます。協会は、第五福竜丸の保存運動がすすめられていた1973年11月に東京都から設立許可を受けました(当初の名称は第五福竜丸保存平和協会)。財団は、第五福竜丸の船体の維持管理、永久保存をつうじて、原水爆の問題についての教育啓蒙活動をすすめることをその寄付行為にうたい、第五福竜丸を保存するための展示館の建設について、東京都との協議を重ねていきました。

1974年、東京湾の海浜部の公園として造成が決まった夢の島の施設のひとつとして展示館の建設が、第五福竜丸船体を都に寄贈することを条件に決められました。

展示館の建設は、1975年に着工され、76年6月10日に開館、第五福竜丸平和協会は、東京都から業務委託を受けて展示館の管理運営にあたり、こんにちに至っています。

展示館は、第五福竜丸<東京水産大学の練習船「はやぶさ丸」>が廃船処分となり、夢の島に放置され、保存がよびかけられた1968年春以来、9年余のとりくみのなかで、原水爆の禁止を願い、平和を求め、被爆国の運動と市民の声の高まりを受けて東京都により建設が実現しました。

平和協会は、11月29日に設立30周年の記念祝賀会を開きます。

## 見崎吉男さんが講演

第五福竜丸の漁労長だった見崎吉男さん(焼津市在住)が、被災50年を前に水爆実験に遭遇した航海について語る講演会がおこなわれました。

講演は、9月23日の久保山忌に故久保山愛吉氏墓参追悼のつどいに続く学習集会(静岡県3・1ビキニデー実行委員会主催)でおこなわれました。

また、9月30日には、ビキニ事件を記録する「市民ネット焼津」の主催で行われた講演会で2時間にわたり話をされました。

見崎さんは、これまで航海のことについては話をしなかったが、50年を期に責任者だった自分が知りうることを残しておきたいと講演の動機を語りました。

平和協会では、見崎さんの了解を得てこれらの講演を映像として記録しています。

## 9.23にさまざまな催し 49回目の久保山忌

秋のお彼岸にあたる9月23日の久保山忌に、第五福竜丸展示館ではさまざまな記念行事がおこなわれました。久保山忌句会は、秋晴れのすがすがしい日に見舞われ、参加者は20名は午前10時に久保山記念碑に献花し吟行。そのあと会場を東陽町の高等文化センターに移し、句会をおこないました。会ではジャーナリストで被爆者の吉田一人さんから、今日の世界の戦争と核をめぐるうごきについての講演を受けたあと句の投票をおこないました。



この日1席に入った作品。

野分後のあらぐさ起たす遺言碑  
飯田史朗

会には平和協会から山村茂雄理事が出席し、「特別船員賞」を贈りました。

平和を語る集いは、11回目。平和やビキニ事件、原爆被害などをテーマにした語り、紙芝居、朗読劇や音楽演奏が披露され、70人が参加しました。集い実行委員会から平和協会にカンパが寄せられ、安田事務局長から50周年記念事業についての紹介がなされました。



東京原水協の9.23福竜丸のつどいは、午後1時に展示館に集合、平和協会の川崎昭一郎会長の挨拶につづいてボランティアガイドの米内達成さんの案内で館内を見学しました。つづいて夢の島マリナー会議室で学習会をひらきました。会では被災50年を前に整理作業がすすむ久保山愛吉さんに寄せられたお見舞いの手紙の朗読、大石又七さんのお話などがあり、60名が参加しました。

マグロ塚の会は、築地で仕入れたマグロを食べながら参加者それぞれの近況報告や今後のとりくみなどについて懇談がおこなわれ、20名が参加しました。